

仕方散々に付、兩人共御改易候て、足輕は一倍の俵數御加増被下候。右宿直の内一人は、中西吉左衛門祖父某の筈に候處、故障有之振替泊ける故に無別條と也。

一、杉山小助射藝を會得す

杉山小助は、吉田大藏弟子にして射術に巧也。然れどもいまだきりの味不快、毎々大藏教訓すれども不自得。或時大藏庭前の竹を截來て、元結を以て弦として小助に向ひ、此味を合點めされよとて、小刀を以て其弦の眞中をふつと切れば、兩方へわかるゝを見て小助得心し、其儘菴藥を射る。大藏見てもはや無殘所とて悦けると也。

一、たへまの御腰物正宗となる

微妙公萬づ器物を數寄給ふ内、名作の刃物集めらる。正宗は正宗、貞宗は貞宗と御よせ被成、箱に入置る。御逝去後本阿彌光甫に、右御刀・脇差のぬぐひ被仰付けけるに、正宗の箱の内に、たへまの御腰物一腰入在之。光甫拜見し、是は御家に無隠たへまに候。然るに此内へ置せられける事、御目つよく候間、正宗に可成ものと被思召ての事なるべし。劔を性に入仕候はゞ、正宗に可成候間、預り申度と願ふ。年寄

中詮議の上、光甫へわたされ、請取京へ歸り、隨分正宗の劔にして、扱江戸の家元へ遣しけるに、隨分の出来ものなれども、正宗には不可成とて極めず。光甫扱々口惜き事也と、晝夜工夫をこらしけり。或暮合に家名は忘れぬ、六右衛門と云へる心安くする町人來りけるゆゑ、幸ひ隙なる間、今夜は咄し候へとて家來を返し、かけむかひに世上の事を咄す内に、六右衛門云けるは、我等隠居の身になり、後生を性に入れ願へども、昔よりの心なほらず、内の者共いやるゆゑ、是にては佛には成まじと、頃日は佛に成分別を止て、能き六右衛門となるべしと工夫して嗜めば、いつの頃よりか内の者共も、六右衛門様は佛の様にならせられたると譽ると咄ければ、光甫つくゝと聞之、ふと立て、今夜は俄に隙入事出来したり、歸りてくれよと云。六右衛門も不興ながら無理に歸し、扱かの御腰物を藏より取出し、正宗の劔を取置、やはりたへまの劔を極上にして、江戸へ下しければ、正宗正身也と極りて、御家へ上候けるとなり。正宗にせん／＼と仕たるゆゑ、似せ物に成り家元不受合、たへまの上上に仕たれば、其上は正宗の外に可成ものなし。故に極り

たりとぞ。

一、大猷公の微妙公邸へお成

大猷殿下、微妙公の邸へ被爲成候時、本多安房守政重、革袴に戻子肩衣着し、白洲へ出迎、中腰に成り御駕へ向ひ、今日御機嫌能様に頼申上候。御機嫌悪ければ、父子のもの機嫌あしく候間、是々に御座候とて手を合被申候。殿下成程々々心得たと上意有之しとぞ。

一、富士山を越ゆる鳥

富士山の絶頂を越ゆる鳥なし。唯鷺のみ越之。鷺は諸鳥に超て鈍なるゆゑと、清水長兵衛語りし也。

一、百足にさゝれたる妙藥

百足にさゝれたる妙藥は蕨也。無之時は、蕨繩をかねて付てよし。

一、宗信蹴鞠の免許を受く

享保年中本藩へ宗信名字といふ外科、他國より來り三四年居住す。醫術も上手にて蹴鞠の達人也。飛鳥井殿より免しを取たりと云。其話に予高辻殿痛所の療治して、早速平癒しけるに、高辻殿悦び、今度の痛所大切成事也しに、はやく

宜成しは、ひとへに其方療治ゆゑ也。此謝禮に堂上の事、何にても承度事あらば可申聞との事なりければ、宗信外に望の事も無御座候。蹴鞠好きの道なれば、何とぞ飛鳥井殿のゆるしをもらひ申度と云。高辻殿聞れ、まりの免といふは、装束をもらふ事也。成ほど取もちとらせんとて、書狀を調、其方直に持參せよとて渡さるゝゆゑ、持て行ければ、飛鳥井殿披見にて、大切のものなれども高辻達て御依頼なれば遣すとて、廣蓋に新敷装束を載せ給りぬ。宗信悦び持歸、則高辻殿へ懸御目ければ、高辻殿不興にて新敷装束は給りしかひなし。着おろしの装束ならねば免しにあらず。此装束を持て返し、此書狀を懸御目よとて、又調へわたされければ、其如く持參し上之。飛鳥井殿文を披見し、さて／＼無理の所望なり。されどもいなどいひがたしとて、古装束に取かへて給りけり。右二度めの文の内に、一首の詠歌をつかはし給ふ。依之默止がたしとてゆるされしとぞ。其詠、

紫の色とはいへど染殘す葛の袴のうらみある世や

一、錢を以て知行を宛行ふこと